

# 沖縄ルポ I

## — 離島を歩く —

別府大学文学部人間関係学科  
教授 富吉 素子

### ① はじめに



海中道路

沖縄に足を運ぶようになって早、15年になる。特に、90年代の前半はよく訪れた。ひとつには、沖縄の最古の文献『おもろさうし』を読み解くのに、その背景を知るためであり、もう一つには、本土とは異なる家族の姿や、婚姻の風習を知るためであった。

地域的にもっともよく訪ねたのは、中部勝連町の離島・浜比嘉島である。浜比嘉島の二集落は、市町村合併により、本年（2005年）4月より「うるま市」となっている。本島からの交通は、勝連半島の突端から、海中道路を通り、平安座島を経て、さらに橋を渡って、到達することができる。島の周囲は約6.6km、南北2km、東西1km、総面積2.45平方キロメートルの小島である。島には二つの集落がある。「浜」集落と「比嘉」集落である。人口は「浜」は364人、「比嘉」は222人、半農半漁の島である<sup>1)</sup>。

2005年の9月の初めに久しぶりに島を訪ねた。浜比嘉島は、以前は離島であったから、調査に行き始めた当初はいつも船で渡っていた。勝連半島

の先端にある屋慶名港から30分位であった。当時は船しかなかったから雨の時も日照りの時も船で渡った。台風の時には港で足止めされたこともしばしばあった。90年代の中ごろから架橋工事が始まり、96年に完成した。1年間は強度試験期間であり、正式には97年に開通した。橋はみごとなもの、橋の上から見渡す海の風景と眼下のエメラルドグリーンのは、一人でみるのはもったいないほどの美しさであった。当時、筆者は架橋10年後には島が変化することを予測して、もう一度来ることを心にひそかに誓った。今回の旅の目的は、10年にはまだ少し早い、その検証と、なつかしい人々に会うことであった。

### ② 浜比嘉島は変わったか

浜比嘉島はこの10年間の大きな変化として架橋があり、また、「市町村の合併の特例等に関する法律」に基づいて市町村合併があった。この環境の整備や行政区域の変化の結果として島の生活環境はどういう点が変わったのだろうか。1995年から2005年を中心に考えてみたい。

浜比嘉島の多くは緑や木に包まれている。その中で島の西側にある浜集落と東側にある比嘉集落の周辺の環境はかなり変化した。変化した点を浜集落を例にみると、まず集落を取り巻く道路は拡張工事と舗装により「観光地」並になった。以前は多くは舗装されていず、雨天のときは水溜りなどができていた。また行き止まりであった道路は後述する白浜ビーチに沿うようにL字型に拡張されなかなかの立派さである。次に、深い緑に包まれた島の住宅は昔ながらの木造家屋や新築住宅でも白やベージュの簡素なものであった。そこに黄緑色や黄色のパステルカラーの建売住宅が3棟建

<sup>1)</sup> 住民票の届け出上の数字であり、実際には、両集落ともに100人弱の人々が生活している。

ち、「販売中」であった。これは、その色と形が周囲と調和してないように感じた。

しかし、一步集落の中に足を踏み入れると、狭い道路に人影はほとんどなく、福木<sup>2)</sup>は、そよそよと風になびき、以前訪れた時と同じようにシンと静まりかえっている。そして、門をくぐり、ヒンプン<sup>3)</sup>の横を通ると、そこではお年よりたちのおしゃべりの光景が見られる。以前よりはそれらの姿が減ってはいるが、お年寄りの様子は変わらない。

先述したように島の大きな変化は97年の架橋と、05年の市町村合併である。97年の架橋は離島振興法に基づき、3年の歳月をかけて完成された。開通式には村で現在3代揃っている家族の渡り初めがあり、行政、村人たち、工事関係者でお祝いながされた。それから、8年になる。しかし架橋はされたがまだ「僻地」と認定されていて、行政の施策が必要とされている。つぎに、その島の問題点のいくつかをあげてみたい。

### (1) 高校進学

中学卒業後の子どもたちは、島内に高校がないため、これまで島の外に進学してきた。

本島の沖縄市内や那覇市内の高校に進学することが多かった。親戚や知人が頼れる場合はそこで暮らし、そうでないときは、アパートを借りてそこから通学する。一方本土においては、一部の寮生活の高校生などを除いて、通常は自宅通学生が多い。一般的には大人でも単身赴任の一人の生活はさびしいものだと思われる。まして高校生であれば、アパート住まいは寂しく不便でもあろう。そうであれば架橋されたことは島からの通学を可能にするから、島からの通学者が増えたのではないかと思っていた。今回、島から高校までの自宅通学の変化について尋ねたが、変化はないという。理由を尋ねると、橋は東寄りの風をまともに受けやすく、風速15mを過ぎると危険防止のため、通行止めになる。台風銀座といわれる沖縄で、このような低い風速で通行止めになるのでは、橋を信頼し、安心して通学することはできない。したがって、高校生は相変わらず那覇市内や沖縄市

内の高校に通っているそうである。これは島の皆さんにとっては想定外であったのではないだろうか。

### (2) 白浜ビーチ

次に架橋は島に「経済効果」をもたらしたのだろうか。かつて島には1軒のパーラー（軽食堂）があった。そのパーラーは港の前にあり、5、6人もすわればいっぱいになる小さなものであった。パーラーは、島の二人の女の人が細々と経営していた。暑い日は、こどもがアイスを買に来、お昼は外で簡単にすませるお年寄りが食事に来ていた。また架橋工事中には工事関係者が、まとまった数のお弁当を買に来ていたので、パーラーはそれなりに潤っていた。やがて工事期間も終わり工事関係者がいなくなるとその需要はなくなった。1年間の耐用試験期間後は元の状態に戻り、経営は悪化し、店は閉じられた。島には元々3軒の小さな雑貨屋があり、毎日船で新聞や食品が運ばれ、商品が並べられていた。アイスもパンもそこで買えた。商店を利用すればパーラーがなくなっても、子どももお年よりも特には困らなかった。島全体にとっては、パーラーの閉店はあまり痛手ではなかったかもしれない。しかし、パーラーの女性二人は失業してしまった。二人にとっては死活問題のできごとであった。

このパーラーの閉店後に白浜ビーチが整備された。ビーチ沿いには、新しく3軒のパーラーができた。これらのパーラーはビーチ利用客をターゲットに開かれたものと思われる。店も少し大きく、メ



白浜ビーチ

<sup>2)</sup> オトギリ草科の高木。熱帯の海岸に生じ、沖縄では防風の目的で生垣とする。

<sup>3)</sup> 沖縄で家の入り口と母屋との間に造る石造りの壁。

ニューも多い。さて、シーズン中はこの小さな島に多い日は100台の車が駐車するという。特に駐車場があるわけではないので駐車は路上駐車となる。停まりきれない車は住宅地の狭い路地にまで入り込む。その「外人部隊」はパーラーを利用しない。

浜辺は泳ぎやバーベキュー、音楽を楽しむ者で賑わうが、財布の紐は固く、ほとんどパーラーを利用するものはいない。その理由は、レジャー客は車でやってくる。車で、飲食物からバーベキュー用の燃料にいたるまですべて持参するため、利用する必要がないからである。そして残るのは多くのゴミの山である。

実際、浜辺を歩いてみたが、ビーチと歩道の間の植え込みのそこそこに、大きなビニールのゴミ袋が放置されていた。シマの人たちは、はじめは怒り、掃除をしていたが、今はあきらめ顔である。

ついでにつけ加えると、このビーチはハブクラゲがいる。毒性が強いためクラゲにさされることを恐れて、シマの人たちは泳がない。ビーチには「ハブクラゲ」注意の看板が立てられている。しかし、外来者は知ってか、知らずか、海に入り、泳いだり、ウインドウヨットを楽しむという。「夏は毎日、救急車がくるんだよ」と区長はいう。多いときには日に数回も救急車が来るという。救急車が対岸から橋を渡って来るということは、「経済効果」どころか、迷惑千万といわざるをえない。そして、これもついでに、つけ加えると、ハブクラゲにさされた人は、まず、店（パーラー）に飛び込む。店の人はひとまず、酔をつけておくことを勧めるが、かれらが酔を持参していることはないから、緊急事態でもあり、自分の家の酔をつけてやることとなる。それが度重なる損した気分になる。

また炎天下では「帽子をかぶりましょう」という有線放送を公民館からビーチに流す。

しかし、効果は薄く、帽子をかぶらないひとが多く、対策に頭を痛める。

### (3) 診療所と郵便局

シマには以前は、診療所がひとつあった。そこには常駐の医師が1名、家族とともに派遣されていた。沖縄市の中部病院の出先機関・浜診療所であった。みな健康面は安心してた。夜でも、急

なときでも診てもらえたし、何よりもお年寄りが歩いていくことができた。島内で、誰にもたよらず、ゆっくりと歩いていける距離であった。しかし、架橋後は、患者さんは車で移動できるということで、診療所は廃止になった。車をもたず、運転もできないお年よりはとたんに困った状況になった。それからは対岸からタクシーを呼び、通院することになった。日中は働く世代は不在であり、頼れる人がいないためである。

このように、架橋により、確かに交通は便利にはなった。しかし、以上述べたような改善すべき点もあることが判明した。また、もう一つ架橋によるものではないが、時代の波に抵抗できなかったことがある。それは、郵便局の廃止である。シマには小さな郵便局が一つあった。今回の旅で、郵便局がなくなったことがわかった。それはおそらく公社化に伴うものであろう、と推察された。この結果、郵便局の利用は本島まで行かなければならなくなった。お年寄りは直接的には年金の受け取りがあるが、これは、対岸の勝連半島の屋慶名か、石川まで行かねばならないという。これもまた、タクシーが頼りである。しかし、郵便局は元々シマの人々もあまり利用していなかった節がある。郵便局は貯金業務、保険業務、郵便業務などからなるが、預貯金は、漁協や農協、シマ外の銀行が利用されていた。それは、狭いシマのことであるから、理解できる。しかし、これにより、困ったのは、先のお年寄りたちの年金の受け取りである。もし、どんなに小さくとも郵便局があれば、お年よりは歩いて受け取りにいけるが、これももし、架橋がなければ、公社化になったとしても、廃止にはならなかったかもしれない。架橋により、概ね、便利となったシマの生活であるが、以上のような、マイナス効果も無視してはいけないのではないか、と思った。

## 3) シマのおばあに会う

シマには、何人か親しくしていただいているおばあがいる。「おばあ」とは、もちろん「おばあさん」を沖縄で呼ぶときの愛称である。はじめは、呼ぶのに少し抵抗があったが、「おばあさん」よりも気取らず、親しみがあって、好きになった。今回と次回にわたり、二人のおばあをご紹介します。



アマミキヨの墓

い。

西浜チヨさんは、私が時々泊めてもらうおばあである。声が大きく、畑づくりの大好きな人である。「西浜」は「西浜門」を略したものである。昔、「西浜門」家は本家の「浜門」家の西側に位置していたと思われる。一方おばあの実家は、歩いて数分のところにある。おばあのお姓は「大内」といった。「大内」は昔、「大殿内」といった。ノロ筋の家である。

「ノロ」とは「祝女」の字が当てられ、「祈る人」「宣る人」という意味である。沖縄の土着の信仰である「おなり神」信仰や「根神」などと同質的なものと考えられている。その発生の本をただせば、沖縄で按司が出現した8、9世紀ころ以後、按司のおなり神がノロと呼ばれ、按司の支配地一円の最高神女の地位を占めた。ノロの性格は根神と同じだが、さらに根神よりも政治的色彩の濃厚なものであった（沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』）。

隣村の比嘉集落にアマミキヨ・シロミキヨという沖縄の祖先神が祭られている。大内家では祭礼行事のときにこの場所を訪れて祭祀を行うことから、大内家は村の草分けの家であり、ノロ職を担当していたものと考えられている。大内家の敷地の一角には拝所があり、祭壇には美しい扇や香炉が飾られている。

つまり、西浜のおばあはそのような由緒正しい大殿内家の出身の人だったのである。

おばあは、戦前若いときに、岡山・京都方面の紡績工場に働きに行き、右手を手首から切断する事故にあった。それからの人生はすさまじかったという。沖縄に戻ったが、再就職のため大阪に行った。そのときは戦争中であり、本土で移動中、

熊本で列車事故にあった。そのときひざを骨折したが、誰も助けてくれる人がなかったので、骨折したひざを手で抱えて、次の駅まで2時間も歩いたという。今では考えられない体験の持ち主である。

おばあには子どもが7人いる。長女は家族と近くで暮らしている。今は一人静かにシマで暮らしている。三線が上手であり、歌を歌いながら弾く。右手が不自由だから、腕に撥を縛って弾く。10年ほど前、訪ねたときには、「島根から親戚が帰ってきているから、遊びにいこう」と誘われて、数軒先の親戚を訪ねたのが午後10時頃。それから、酒盛りと歌と三線で盛り上がった。そのときもずっと、撥を放さなかったという人である。

おばあはとても明るく、大きな声で笑う。今回の訪問の2日目の朝、どこからか電話がかかってきた。答えているのが自然に耳にはいる。「ウン、元気だよ。きのうヤマトから、お客さんが来た。取材しているお母さんがいてヨオ、前から、わたしに惚れて来てるんだよ。この人、台風に追いかけてたいへんだヨオ」と言っている。聞くと、対岸の役場から週3回一人暮らしのお年寄りに電話があり、その順番が一番なので、朝8時半に決まってかかってくるという。

そのおばあは、盆暮れに子や孫が帰ってくるときには山のような食事を作る。その一つが煮しめである。材料の一つ椎茸は本土のものがよいという。その中でもどんこ椎茸がふっくら炊けてよいという。わたしはこの10年間、飛び切り上等の大分県産どんこ椎茸を、盆暮れに贈り続けた。喜んでもらっていると思っていた。すると、今回、おばあは、こう言ったのだ。「あんた、椎茸は今は、こっちでも売ってるよ。送料使ってもったいない。もう送らなくていいサア」。少しびっくりしたものの、それなら、何がいい？ときいてみた。するとおばあらしい返事が返ってきた。「椎茸送らずに、幸福送れ」。ウン、「幸福を送れ」とは、禅問答のようであった。

時間が前後するが、1日目の夜、暑い夏に扇風機をかけながら、晩御飯をご馳走になっていた。ガラス戸をあけて二人の夫婦らしい人が入ってきた。おばあは、「ご飯食べる？」と聞くと、二人は「うん」と答えた。3人でひとしきり沖縄弁でしゃべっていた。もちろん、私は何を言っている

のかわからず、3人をながめていた。一段落して、「ご親戚の方ですか」と聞くと、違うという。おばあは「ダンナさんの方が、娘の知り合いだったけど、今は、わたしが友達サア。最近、夫婦2人で具志川から車で平安座までやって来て、2時間ほどジョギングして、帰りにご飯を食べに寄るんだよ。おいしい水だといって、20リットルの水を持ってきて、タンク（台所用ポリ飲料水器）に入れていってくれる」と、屈託がない。ちよくちよくやって来てご飯を楽しく食べて帰るといふ。まさに「ちゅらさん」的世界である。

2日目、狭い集落の中をまわり、おばあの家を帰宅後、尋ねる。「おばあ、アガリのSさんは、お元気ですか。以前はいろいろとお話を聞かせてもらったけど」。おばあは答える。「うん、今は老人ホームにいるよ」。わたしが、また、たずねる。「以前、T子さんの旦那さんが、『親孝行しなくて、世の中に、ほかに大事なことがあるかね』って、言ってたけど、やっぱり、老人ホーム?」。おばあは答える。「うん、だんだんそうになってきたね。若い人が変わってきたねエ」。そういえば、区長さんも、「祖先崇拜や親孝行もくずれてきた」といっていた。時代の変化は、この離島にも押し寄せている。そして、T子さんのダンナさんも当時は40代であったが、今はまだ若い50代の身で、脳梗塞で入院しているという。

同じ日に、対岸の屋慶名に行った。そこは以前、港があったところであり、そこから、島へ渡ったところである。昔のなつかしい姿を求めて行って見たが、もう港はなく、道路の反対側には、白い2棟の老人ホームが建てられていた。「実習生用」と大きく書かれた駐車場の広さが、地方の伸びやかさを感じさせる。ここは2棟であったが、車で走ると、全体的に老人ホームがふえている印象であり、大事にされてきた沖縄のお年寄りたちも、いまや家族からの分離が進行していると、感じた。

世の移ろいをひしひしと感じた今回の旅行だったが、次回は、もっと元気の出る「ハル」おばあの話を書いてみたいと思っている。